

## 相互依存と国境を越えた人々のつながりで紛争を抑制する

～以下、「9・11から3年 欧州を新秩序のモデルに 非軍事的で多元的な可能性秘める」より～

(田中孝彦・一橋大〈国際政治史〉〈朝日新聞(04.9.9)〉)

注：・・・・・・は省略部分/太字は引用者が強調のためにそうしました。

・・・・・・17世紀中ごろに国際政治の原型があらわれて以来、ヨーロッパでは最も多くの大戦争が戦われてきた。そのたびごとに、重要な経験知が積みあげられてきた。

たとえば、宗教戦争である三十年戦争によって、ヨーロッパは、宗教的なイデオロギーの対立を国際政治に反映させることがいかに危険であるかを学んだ。18世紀のいわゆる「勢力均衡」の時代は、強大な国家による支配の秩序がヨーロッパ大陸にできあがるのを阻止することが外交の課題とされた。いわば、イデオロギーと力の二つのレベルにおいて、多元主義的な秩序観が形成されたといえよう。

その後、20世紀に起きた二つの世界大戦の結果、西ヨーロッパ諸国の政府と市民は、安全保障や紛争抑制の手段として、軍事的には大きな限界があることを学んだ。この経験値は、非軍事的な地域的秩序の構想へときたえあげられていった。それは、政府間の戦略的つながりによってではなく、**相互依存と国境を越えた人々のつながりを強めることで、紛争を抑制する**という考えだ。EU(ヨーロッパ連合)は、この構想が現実となったものだといえる。このように見たとき、「十字軍」を気どるほど宗教的多様性に無頓着で、軍事的な一極支配の秩序へと傾くブッシュ政権の秩序観と、ヨーロッパの秩序観との対照はあきらかだ。

もちろん、EU加盟国の中にも、イギリス、イタリア、そしてスペインのように、ブッシュの戦争に同調した国々もある。しかし、それらの諸国では、政府に対して多くの国民が強烈な批判をあげてきた。スペインではアスナール政権が倒れた。ロンドンでは、イラク開戦前の反戦デモに100万人以上が参加し、さらに今年6月の地方選挙では、ブレア首相の労働党が歴史的な敗北を喫した。ここには、EUの秩序観に反する選択をした政府は、自国の市民によってそのツケを払わされるという構図があらわれている。

EUの秩序構想は、脱国家化かすすむ現在の世界政治の流れにそったものだともいえる。いま、世界政治の場では、相互依存が深まり、人やカネの国境を越えた流れを国家が簡単には制御できなくなっている。この状況にさからうのではなく、それを利用することで、多元的で非軍事的な秩序の形成をすすめているのがEUなのだ・・・・・・。